

若き日の明治天皇

— 人君の学としての論語 —

坂本 一 登

一 明治天皇と西南戦争

ただいまご紹介にあずかりました坂本と申します。國學院大學の法学部で日本政治史を担当している教員でございます。まして、以前から明治天皇については関心をもっておりました。ちょうど今年は没後百年という記念すべき年にあたり、その節目に明治天皇につきまして、お話しする機会をもたせていただいたことを光栄に存じます。

今日は「若き日の明治天皇―人君の学としての論語」というテーマでお話させていただきたいと思えます。具体的に何かと申しますと、政治君主としての明治天皇がどういう人であり、そしてその人柄がどういふふう形成されていったのかという問題を、元田永孚による論語講義を通して

と考えてみようということがあります。別な言い方をすると、この学会は明治聖徳記念学会と名づけられておりますが、明治天皇の聖徳が涵養される過程について、元田と論語を通して考えてみようということがあります。

日野西資博著『明治天皇の御日常』という本があります。日野西という人は明治十九年に侍従として宮中に入りました。天皇崩御までずっと側で仕えた人です。その日野西が、『明治天皇紀』を編纂する過程で、編者からいろいろと明治天皇の日常生活について質問を受け、その質問に対する答えをまとめたものがこの本です。大正十五年に出された、この本によると、明治天皇の生涯はおおよそ三つの時期に分かつことができるようです。

最初の時期は、だいたい明治十九年ぐらまでで、この

時期はいわば天皇の青春時代にあたり、その時期の最後の頃に日野西が宮中に入ります。新しい明治宮殿が完成しかけ、政治の中では憲法論議が盛んになってまいります。それに合わせて天皇の生活も、大好きだった乗馬などの私的な世界がだんだんと小さくなり、公的な政治の世界が中心を占めるようになっていきます。次の時期は、そういう姿勢が日清戦争をきっかけとして一段と強まり、そして近代日本の分水嶺ともなった日露戦争の頃になると、私的な世界はほとんど姿を消し、政治的君主としての権威が増すと共に、ますます政務に精励する日々になっていきます。そして、日露戦争をなんとかぐり抜けてほっとしたのも束の間、今度は明治天皇が最も信頼していた元老の伊藤博文がハルビンで暗殺され、伊藤遭難後の晩年は、めつきりと老境に入られていった、と。日野西は側で見ていて、そういうふう感じたと述べております。

日野西に従えば、このように明治二十年頃から次第に政治的な君主として精勤していく明治天皇の姿が浮かび上がってくるわけですが、その精励の背後にあったものについて、それまでにどういう教育を受けて、どういうふう形成されていったのか、そうした問題を今日は考えてみようということがあります。

私見によれば、明治天皇の帝王学としては、明治十一年

の元田による論語の講義と、明治二一年に侍従の藤波言忠から受けたシュタイン講義の二つが重要だと思っております。今日はその前半の、そして天皇の人格形成という観点から考えると、より重要だと思われる元田の論語講義を中心にお話させていただきたいと思えます。

明治天皇は、よく知られているように、たいへん謹厳な方でした。といっても、もちろん最初から謹厳を絵にかいたような人だったわけではありません。若い頃にはやはり、やんちゃな時期というものがありません。明治五年、皇居が火事で焼けて、赤坂御所に移転しますが、赤坂御所はかなり広くて、乗馬ができる場所でした。天皇は若い頃からたいへんな馬好きで、そこで陪従する侍従が音を上げるぐらい乗馬に熱中しました。

公務のない日は、朝から晩まで馬に乗りっぱなしで、寒い季節になると、暖をとるためもあって、赤坂御所にある小さな茶屋で酒を飲んで、泥酔して若い侍従たちと一緒に雑魚寝をするという、いまの体育会系の学生たちを彷彿させるような日々を送っていたのです。そのやんちゃぶりを示す一つのエピソードとして、本当かどうかわかりませんが、空腹の際に、赤坂御所の池にいた金魚を焼いて食べたという話も伝えられております。多い年には、一年間に約二七〇回も馬に乗ったそうです。公務や天候のこ

とを考えると、用のない日は、ほとんど馬上にいたとしても過言ではないでしょう。それぐらい好きだったわけで、天皇という点、一般には色白の文化系のイメージが先立ちますが、若き日の明治天皇はむしろ日焼けした体育会系の青年だったのです。

こういう「暴れた」若い頃の記憶を共有していることは、思いの外、重要なのではないかと思えます。つまり、明治天皇は、最初から完成した人格者だったわけではなく、若い頃には周囲の眉をひそめさせるような「乱暴な」時期もあり、しかしそれから苦勞しながら、だんだんと政治的君主として成長していきます。そういう天皇が成長していく過程を、周囲も一緒に成長しながら見守り、体験を共有していった。だからこそ、多くの明治人にとって、天皇の成長ぶりは、自分自身と明治国家の成長の軌跡と重なって見え、天皇は明治国家興隆の象徴となっていたのではないかと思うのです。

ところで、明治天皇は、このように極めて活発だったので、勉強はあまり好きではありませんでした。また政治に高い関心をもっているともいえませんでした。政府関係者にとっては、それが悩みの種で、そうしたこともあって、当時の政府内では、必ずしも君主としての天皇を全面的に受け入れるという雰囲気ではありませんでした。その例を

一つ挙げますと、明治七年の暮、侍従長の東久世通禧が「君徳培養の意見書」というものを提出しています。これは苦言を呈する意見書で、それを読むと、天皇は、日課である筈の勉強にも身が入らず、政府関係者との関係も名ばかりで、しかも君主としての自覚が希薄であると非難されています。当時、政府の首脳は三条実美太政大臣や岩倉具視右大臣が中心でしたが、そういった政府の指導者に一応の敬意は示すものの、心からの親しみはなく、そうかと思えば小さなことで侍従を叱責し、また日々の学習も怠りがちで、しかも酒量が多すぎることを諫めてもなかなか聞きにならない、と述べてあります。もちろん、これは苦言を呈する書なので、誇張もあると思えますが、当たらずにいえども遠からずというのが実態に近いのではないかと思います。

こういう状況をなんとかしなくてはいけないということ、で、明治七年、政府は参議だった木戸孝允を宮中に入れて、君徳輔導、すなわち天皇の教育に本腰を入れはじめます。元田も担当者の一人として、木戸と一緒に、君徳輔導に尽力します。そうした輔導の結果もあって、変化が目に見えるような形で現れるのが、明治九年の夏です。それは、東北巡幸の終盤のことでした。東北を巡回する中で、豊かではない社会の実態や、質朴な人々の暮らしに触れて、考え

るところも多かったでしょう。その頃から天皇は時折、周囲が驚くような積極的な態度で、政治や社会について発言するようになっていくのです。

そして、そうした政治に積極的な関心をもちはじめた矢先に起こったのが、有名な西南戦争でした。この西南戦争は、いろいろの意味で天皇の転機となっています。

明治十年の一月末、明治天皇は実父である孝明天皇の十年祭のため京都に入り、そこで初めて西南の異変を知ります。その衝撃がいかに大きなものであったかは、それから二か月、誰にも会わない、あれだけ好きだった乗馬さえしないという異常な行動に表れます。天皇は、戦争の勃発に衝撃を受け、深刻な精神の危機に陥ったのです。もちろん事柄が事柄なだけに、その詳細はよくわかりません。また、なぜそうなったのかという説明についても諸説あつて定説はないのですが、私は、戦争の成り行きにも不安はあつたのでしょうか、それよりも、膨大な犠牲を避けられないほど、自分の国民同士が激しく相争う内戦を阻止できなかったことに対する、君主としての無念さに由来するのではないかと考えております。

西南戦争の勃発に衝撃を受けたのは、もちろん天皇一人に限られません。政府関係者も一様に衝撃を受け、そこから立憲政治の導入をはじめとする様々な政治改革の機運が

起こります。そしてその一環として、天皇と政府とをより一体化するために、天皇の輔導を強化しようという動きも現れます。明治十年八月、天皇の輔導官として侍補が新設され、徳大寺実則、吉井友実、土方久元、元田永孚、高崎正風、米田虎雄、鍋島直彬、山口正定、少し遅れて佐佐木高行の九名が任命されました。政府主流派から少し距離のある、公家および土佐や薩摩の出身者でした。

さて、天皇の状況に話を戻すと、木戸をはじめとする周囲のとりなしもあつて、天皇は三月末頃から次第に平静さを取り戻し、西南戦争の帰趨が定まった八月に東京に戻ってきます。

帰京後の天皇には、二つの大きな変化が表れます。その一つが、修学意欲の高まりです。従来、お世辞にも勤勉とはいえなかった天皇が、人が変わったように修学に意欲的になっていくのです。侍補の輔導は、九月から本格的に始まりますが、その内容は、今日の大学の演習のように、天皇が毎回和漢の歴史から一つテーマを選び、そのテーマについて天皇と侍補とが自由に討論していく方法がとられました。討論は時に白熱することもあり、そうした議論を通して、天皇は政治や君主のあり方、あるいは君臣の機微というものについて考えを深めていったのです。

どういったテーマが取り上げられたかというと、フビライ

と秀吉ではどちらが一国の将として優秀かとか、楠木正成と諸葛孔明ではどちらが有能な幕僚かなど、設問それ自体はまだまだ興味本位の思いつきのものが多いものの、天皇の関心が君主の役割や君臣関係など、統治に関するものに重心を移しつつあったことはわかります。

それは御製にも表れています。この頃、天皇は一時、病床に伏していたのですが、その時に詠んだ歌に次のようなものがあります。療養中にも、天皇の関心は、自ずと日本の歴史や国柄の探求へと向かっていったのでしよう。「古の文をみるたび思ふかな おのが治むる国は如何にと」。

二つめの変化は、積極的に臣民に親しみ、近づこうとする姿勢を顕著にすることです。「臣民」という言葉の中には、政府関係者だけでなく、国民も含まれます。たとえばこの頃日本でコレラが流行しますが、それを新聞で知った天皇は、毎日侍従に患者数を報告させて、コレラが収まる年末までずっと表につけて案じていました。あるいは、神戸で鉄道事故が起きると、その詳細を調べさせて報告させることもありました。また、地方官が地方官会議に出席するため上京すると、地方の実情を知るために、わざわざ知事を宮中に招いて、天皇自ら知事から県治事情を聴取したこともありました。

西南戦争から帰還してきた将兵に対する態度も印象深い

ものがあります。凱旋将軍たちを宮中で優待したのはもちろんですが、近衛兵が帰ってきたときには、こんなこともありました。戦争ですから、当然に負傷者もいるわけですが、天皇は、将校と負傷兵とともに宴席に招き、食事が終わると、突然、席を立てて負傷した兵士一人ひとりに声をかけながら巡回したのです。その時、負傷兵のみならず、将校たちも一同驚愕し、直立不動となって肩を震わせました。後日も、天皇は、負傷兵の名前、年齢、負傷した場所と状況を調査させ、帳簿にして座右に留めたそうです。

さらに、天皇は、政府関係者とも懇親を深める努力をします。意思疎通をはかるために、政府高官との陪食を制度化して、政府関係者との心理的距離を縮めようとしたのです。

こうした天皇の態度に感じ入ったのか、皇后は、問わず語り、こう洩らします。こうした臣下との交情がもう少し早く行われ、西郷軍にも伝わっていたなら、あるいは西南戦争は避けられたかもしれない、と。おそらく天皇も想いを同じくしたのでしよう、皇后に対して、西郷の罪を論じて功績を忘却するなかれという言葉とともに、「西郷隆盛」という御題で歌を詠ませた、有名なエピソードはこの時のことでした。

ちなみに、西南戦争の勃発は、明治六年政変、すなわち

征韓論政変によって政府が真二つに分裂したことが背景にありました。西南戦争をくぐり抜けた後の天皇と皇后は、これ以後このことを肝に銘じ、なによりも政府の分裂を嫌い、どんなに対立が深刻となっても、分裂を回避するべく可能な限り調停を試みるという行動を一貫してとっていきようになつていきます。

以上のように、西南戦争後の明治天皇は、修学に積極的になり、臣民により近づこうとする姿勢を顕著にします。言い換えれば、よき君主になろうと意欲的になり、そして、よき統治とは何かを手探りで模索するようになっていったのです。その際、そうした天皇の模索と渴望に応えるかたちで、導きの指針となつたのが、次に触れる元田による論語の講義だつたのではないかというのが、私の考えでございます。

二 元田永孚と論語講義

元田永孚は、文政元年（一八一八）に生まれ、明治二四年（一八九二）に亡くなります。熊本の由緒ある武士の家の柄の出身で、横井小楠にも学んだ朱子学者でした。明治四年、天皇の教育係を探していた大久保利通に、元田の学識をよく知る同郷の安場保和が推挙したことがきっかけで、宮中に入ります。この時、元田は五四歳でした。以来、明

治天皇の深い信任を受け、元田は死ぬまで天皇の側近として宮中に仕えます。

ここで一つ留意しておきたいことがあります。儒学者が藩主の教育を担当し、その教育を通して政治的ブレーンとなることは、江戸期以来、しばしば見られた、とくに珍しくもない現象あるいは慣習だと思われるかもしれませんが、しかし、そうではありません。

まず、儒学者が藩主に進講すること自体が、実は江戸期にはなかなか難しいことでした。たとえば江戸期には「儒者料簡」という言葉がありました。一見、理屈が通つていようにみえても、実は実行すれば有害となる思いつき、というほどの意味です。儒者はいろいろと理想的なことを口走るが、世間や実務を知らない彼らの献策は、実際には役に立たず、まともに相手をするに値しない、そういう冷ややかな視線で江戸期の儒者というのはしばしば見られていたわけです。元田も藩主の侍講、侍読になりますが、それは明治維新後のことで、江戸期のことではありません。江戸期の儒者というのは敬して遠ざける、あるいは遠ざけなければならぬ存在で、儒者が藩主の教育を担当し、それに感化された藩主が儒学を背景に改革に乗り出すというのは、決して当たり前のことでも好ましいこととも、江戸期には考えられていなかったのです。

このことを踏まえると、儒者が天皇の教育係になるということは、まさに刮目に値することであり、畏怖すべきことでもありました。元田は、あまりの大役にその任に堪えうるかどうか、自問し躊躇もします。しかし結局、これは儒学者にとって三〇年来の宿願であり、また千載一遇の好機だと受け止めて受諾します。堯舜に体現された儒学、聖人の道を天皇に説き、その聖人の道を学んだ天皇による万機親政が実現して初めて、現時の政治的混迷から抜け出すことができる、元田はそう考えて決意したのです。

では元田は、具体的にどのような教育をしたのでしょうか。前述したように、若き天皇は部屋にこもって書に親しむというより、屋外で体を動かすの方がずっと好きでした。元田は、一旦、論語の講義を試みるものの、若き天皇のそうした様子に、すぐさま儒学古典を本格的に講じるのが尚早だと悟ると、無理強いはしませんでした。むしろ具体的に感情移入のしやすい和漢の歴史に講義の題材を求め、なんとか天皇の政治的な関心や知的好奇心を引き出すと努めました。元田が使用した文献は、日本のものでは頼山陽の『日本政記』や『日本外史』、歴代の天皇の事績を解説した『国史纂論』、それから中国の歴史、中国の君主の行動を論じた『勸善訓蒙』『貞観政要』『唐鑑通鑑攬要』などでした。できるだけ抽象的な議論を避け、歴史上

の人物や事件など具体的な例を通して天皇の意欲を喚起し、知性を活性化しようと心を砕いたのです。

こうした種々の文献の中で、天皇が一番気に入っていたのが、『帝鑑図説』でした。『帝鑑図説』とは、中国の歴代皇帝の出処進退を題材に、君主とはいかにあるべきか、あるいはいかに行動すべきかを、具体的に論じた書です。わかりやすく、直感的にピンとくるころもあったのでしよう、天皇はたいへん好きだったようです。

しかしながら、元田は朱子学者なので、やはり聖人の道を講じたい。とりわけ儒学の中心古典である論語を講義したい気持ちはずっと抱いていました。機を窺っていた元田に、漸くその機会が訪れたのが、明治十一年初頭でした。西南戦争が終わって、修学に意欲的となり、急速に成長が見られる天皇の姿をみて、明治十一年一月、元田は論語の講義を再開することを願い出、天皇から許可を得ることに成功したのです。

論語の講義再開にあたっては、面白いエピソードがあります。この年は、一度、一月七日の御講書始で論語を講じ、それが好評だったこともあって、元田はますます講義再開の意欲を高めていました。ちょうどそうした折り、一つの事件が起こります。正月から天皇が、悪天候にもかかわらず、また周囲の忠告にもかかわらず、連日馬に乗り続け、

御者および馬が音を上げたばかりでなく、あげくの果てに天皇自身も体調を崩してしまいます。一月十二日、あまりのことに侍補一同が改めて諫言し、さすがの頑固者の天皇も今度ばかりは素直に忠告を受け入れます。元田は、その機会を捉えて、天皇が諫言を受け入れた姿勢を高く評価し、自己の力を過信せず他人の批判に謙虚に耳を傾ける寛容の精神こそ君主の要諦であると説き、いつそうの修得を奨励するとともに、さらなる王道の深化を求めて論語の講義再開を申し出たのです。

元田による論語の講義は、一月三二日から始まります。講義全体の概要は、以下の通りです。元田の日記は断片的にしか残っていませんが、この講義期間は、気合も入っていたのでしよう、きちんと記録が残っています。

明治十一年 論語講義日時

一月 七日 御講書始 論語 道千乗之国章

十二月 十二日 御稽古始 帝鑑図説 皇后 日本外史

豊臣氏初編

(侍補 乗馬諫言 聖上嘉納 同僚皆感泣

爾後 御講書中 月二・三回論語を加え政

治之根本を修徳せらるることを請願、嘉納。

同僚皆、聖徳の重進を賀す)

十四日 国史紀事本末 皇后 女訓

十六日 帝鑑図説 皇后 日本外史

(御講前、納諫を賛美し、宏量の奨励を上言
嘉納、小品拝受 不堪感恩)

十七日 国史紀事本末 皇后 元明史略

二五日 帝鑑図説 皇后 日本外史

二六日 帝鑑図説 皇后 元明史略

二八日 国史紀事本末 皇后 詩経

二九日 帝鑑図説 皇后 元明史略

三一日 論語学而首章御講義 今日始講論語 御

講一

皇后宮 元明史略

二月 四日 論語 御講二 皇后 詩経

五日 国史紀事本末 皇后 記載なし

六日 論語 御講三 皇后 御講

七日 国史紀事本末 皇后 記載なし

八日 帝鑑図説 皇后 記載なし

九日 論語 御講四 皇后 元明史略

十三日 帝鑑図説 皇后 日本外史

十四日 帝鑑図説 皇后 元明史略

十五日 国史紀事本末 皇后 日本外史

十八日 国史紀事本末 皇后 詩経

(以降、天皇 皇后 元田、風邪により休講)

三月十五日 帝鑑図説

十六日 帝鑑図説

十八日 論語 御講五

十九日 国史紀事本末 皇后 元明史略

二〇日 帝鑑図説 皇后 日本外史

二一日 論語 御講六

二三日 帝鑑図説 皇后 元明史略

二六日 論語 御講七 皇后 元明史略

二七日 帝鑑図説 皇后 日本外史

二八日 論語 御講八 皇后 元明史略

二九日 帝鑑図説 皇后 日本外史

三〇日 論語 御講九 皇后 元明史略

四月 四日 論語 御講十 皇后 元明史略

五日 帝鑑図説 皇后 日本外史

(こゝで日記は中断している)

(『元田永孚日記』『元田永孚文書』第一卷所収)

一月三二日の条を見ると、「論語学而首章御講義奉仕(中略)今日始講論語」と書いてありますので、この日より論語の講義を「学而首章」から始めたことが分かります。そ

れから二月四日、二月六日、二月九日と、二月中旬まで精力的に続けられますが、天皇も元田も風邪をひいた関係で一時期中断します。三月の中旬から再開され、それ以降、三月十八日、二一日、三月二六日、三月二八日、三月三〇日、四月四日と集中的に講義が行われました。この記録が正確だとすると、約二ヶ月の間に計十回の講義が行われたこととなります。

なお、皇后もたいへん聡明で勤勉な方でしたが、元田は天皇とともに皇后にも別立てで講義しています。具体的には、『日本外史』とか『元明史略』とか『詩経』を講じました(論語は、後年講義しています)。

さらに、この資料には、講義文献として、『論語』のほかに『帝鑑図説』と『国史紀事本末』が出てきます。天皇が『帝鑑図説』をいかに気に入っていたかがよくわかります。また、『国史紀事本末』は、明治九年に刊行された本で、著者は青山延光という水戸の儒者です。彰考館や弘道館の講師を務めて、『大日本史』の編纂にも大きな貢献をしたといわれています。歴代の天皇の業績を綴った本ですから、日本の天皇家の歴史もこの本を通して学んでいたのでしょう。

講義の内容に入る前に、『論語』について少し触れておきたいと思います。『論語』はなぜ『論語』という題名な

のか。別の言い方をすれば、『論語』という題名は何を意味しているのかということです。これに関しては、一海知義先生が『論語語論』という本の中で次のように説明されています。『論語』とは「論」と「語」という二つの漢字が結びついて出来た言葉で、「論」という漢字は、人に対して一方的にしゃべることを意味する。すなわち、論争とか議論の際によくあるように、自分の言いたいことを一方的に言い立てるのが「論」です。これに対して、「語」は、対話を意味します。とくに教訓的なことを話し合うのが「語」だという説もありますが、必ずしも教訓的なことだけではなくて、広く対話をするというのが「語」です。つまり、『論語』とは、孔子という先生が一人で語ったこと、および孔子先生と弟子たちとが話し合ったこと、この両方が編纂されているという意味なのです。

『論語』がいつ成立したかについても諸説あるのですが、孔子の弟子の弟子たちが断片的に残っていた記録を寄せ集めて作ったというのが有力です。孔子が亡くなったのが紀元前五世紀前半で、だいたい紀元前五世紀末頃にできたといわれています。孔子が死んで数十年ぐらいたってからできていくわけです。ですから、きちんと記録が残っているところもあるし、記憶があやふやなところや、記録が失われたところもある。『論語』という文献は、いわばそうし

た雑多で断片的な記録の寄せ集めという性格をもっていて、必ずしも体系的な書ではないのです。それで『論語』というのはいろいろな解釈の仕方が可能となって、延々と現在に至るまで『論語』をどのように読むかという議論が続いているわけです。

では、日本にいつごろ入ってきたかという点、『日本書紀』の記述を信じてとすれば、応神天皇のときに百濟から王仁博士が伝えたということになっていて、それは大体五世紀ぐらいです。『論語』が中国でできてから約千年たって日本に伝わったということになるわけです。

さて、私は、元田の論語講義が明治天皇に大きな影響を与えたのではないかと考えているのですが、どのような講義が行われたのかを、正確に復元することは実は困難です。というのも、元田文書の中には大量の論語講義の草稿が残存し、しかもそれらの草稿は繰り返し推敲された跡が残っていて、どの講義案が実際に使用されたのかを断定することは難しいからです。しかし、幸いなことに、おおよその講義内容を推測することは可能です。内容的にも形式的にも、元田文書中にある「経筵論語進講草案」（『元田永字文書』第二巻所収）と題された文書が、明治十一年の講義草案ではないかと推定されているのです。

この「経筵論語進講草案」の内容については、すでに明

治時代から知られていました。まず明治三十三年に「本書は東野元田先生の天顔に咫尺して進講されたる筆記」との「例言」を付した上で、吉本襄が『経筵進講録』として刊行しました。次に明治四三年、元田と同じ熊本出身の徳富蘇峰が、改めて緒言などを付して『元田先生進講録』と題して復刊しました。この本は、その後幾度か版を重ねたので、いまでも時々古本屋で見かけることがあります。今日は、この徳富蘇峰が編纂をした『元田先生進講録』を中心に元田の論語講義を紹介していききたいと思います。

『元田先生進講録』の目次は、以下の通りです。

- | | |
|-----------|----------|
| 第一 学而章 | 第二 孝弟章 |
| 第三 巧言令色章 | 第四 忠信章 |
| 第五 道千乘国章 | 第六 弟子入孝章 |
| 第七 子夏曰賢々章 | 第八 君子不重章 |
| 第九 貧而無詔章 | 第十 為政首章 |
| 第十一 知者不惑章 | |

『元田先生進講録』は、「第一学而章」から始まって、「第十一知者不惑章」まで全体が十一章から構成されています。御講書始で講義した「道千乘国章」も含まれているので、それを勘案すると、講義の回数ともびつたり一致し

ます。これを見ると、『論語』の二〇編全部を講義しているわけではなく、元田が重要だと考えているところを抜粋して集中的に講義していることがわかります。

元田の講義の内容は多岐にわたる、その要点もいろいろあるとは思いますが、ここでは統治論と修養論という二つの観点から考えていきたいと思います。

まず統治論ですが、論語は元来人が人として生きるための学問であって、君主とか官僚とかに限られない、誰でも学ぶことができる教えという性格をもっています。しかし、元田はその論語を取えていかなる国のいかなる時代にも通用する統治の要諦を記した「人君の学」、すなわち帝王学の書と読みかえて講義していくところに第一の特徴があります。

次に元田が重視したのは、修養論です。元田にとって論語の教えは単なる人格陶冶のための学問ではなく、統治のための実践的な学問だったので、単に頭で理解しただけでは足りず、それが身体にしみ入り無意識のうちに実践できるように初めて、本当に学んだということになるのです。そのような境地に達するための心構え、すなわち修養の仕方を、元田は厳しさとともに強調していくのです。

まず、統治論から紹介していきたいと思います。元田は、最初にこれは天皇に対する講義なので、専ら「人君の学」

すなわちいかに天下を治めるかという観点からを講じると述べます。「陛下の御講学なれば、臣請ふ専ら人君の学を講ぜん。人君の学は、天下を治むるを学ぶに在」り。周知のように、朱子学においては、統治と教育とは一体で、君主が自ら学んで聖人となり、万民を感化し率いていくところに統治の要諦があります。「人君、躬親ら勤め学びて、天下に率先し、之が教道をなさざる可らず。是れ君となり、師となるの天職ある所以なり」。

では何を学ぶのでしょうか。これこそ孔子の道、論語より他はないと元田は言い切ります。「今日苟も学を為す、始めに先づ其取捨先後を審にせざる可らず。況や人君の学、其学ぶ所、即ち天下の法則となる故に、人君の学は、孔子の学を学ぶより外なし」。

では、なぜ「孔子の学」なのでしょう。元田は、公平でバランスのとれた普遍的な統治の大本があるからだと答えます。すなわち狭い個々の専門領域の学ではなく、広く万民の共存を可能にする人倫の根本を、「孔子の道」は明らかにしてくれるからだと言張るのです。「孔子の所謂学は、至中至正の大本達道にして、修身平天下の道德学なり。当世所謂学は、一科々々の学、異端末枝の謂ひにして、大本達道の学に非ず」。

元田が、このように論語の普遍性を強調する時、二つの

ことが念頭にあったと思われれます。ひとつは、孔子の道は所詮中国の道であって、日本の道ではないという立場に対する反論です。元田は言います。「陋儒浅学は、是は孔子の道なり、漢学なりと云ひ、或は聖人の道は、儒道にして、我邦の道に異なり、我邦の道は神道なり」と。だがそれは正しくない。これらの説は「皆な道を知らざるの論なり。道は天地人倫の大道にして（中略）皆な同一の理にして、孔子は斯道の先覚」である。その証拠に、日本においても「応神帝より以降、代々聖帝明君と称し奉る御代は、皆な孔子を御尊信にて、実徳を修め給ひし故に、天下治平に至」り、これと対照的に、藤原氏以降、孔子の道を軽視するようになって世は乱れた。そうであってみれば「先皇の道は、孔子の道、孔子の道は、天地人倫の大道、天理人道に順へば、則ち天下治まり、天理人道に違へば、則ち天下乱る。毫も疑を容れざる所」なのです。

もうひとつ、元田が緊張感をもって対峙したのは、洋学でした。古臭い孔子の学などではなく、西洋文明国の法律学や経済学など最先端の学問こそ統治のために学ぶべきではないのかという立場です。

元田は、この議論に対して、こう反駁します。物事の表面に心を奪われてはならない。物事の根本に心を寄せなければならぬと注意を喚起するのです。「維新以来、朝野

の論、皆な此の如し。蓋し欧州の文明を耳聞目撃する者、其の事業の末にのみ瞑眩して、本に反ることを知らざるなり。凡そ天下の事、本を棄てて、末の大ならんことを望む、決して其の理なし。今、孝弟仁愛の本なくして、徒に事業功利の末を盛大にするときは、天下皆な功を競ひ、利を争ひ、事を好み、業に趨り、家に孝弟和順の子弟無く、国に忠愛純良の臣民無からしむるに至る者、目を刮て待つべきなり。豈憚々乎として危懼せざるべけんや。

もちろん元田も、西洋の学問の有用性を否定するわけはありません。中国や日本よりもむしろ西洋文明国に、当時においては聖人の道が十全に実現されていると認めた横井小楠の弟子である元田は、洋学的重要性も十分承認していました。しかし表面的な華やかさに幻惑されて軽佻浮薄となり、人が人として生きる倫理を蔑ろにして道徳を放擲すれば、国家の統治は不可能となると警鐘を鳴らすのです。そして、よくよく考えて事の軽重と学ぶ順序を間違えてはならないと主張するのです。「孔子の学を学びて、根本已に定まりたる後は、法律、経済等、西洋の科学をも学び、識見を博するは可なりと雖、孔子の学を後にする時は、根本立たず。遂に道徳を損し、人倫に悖り、身修まらず、家齊はずして、国治まらざるなり」。

では、こうした普遍的な孔子の教えとは、何なのでしょ

うか。元田は、仁だと答えます。「孔門の学は仁を求むるを以て主要として、仁道は天下を平かにするを以て極功とす」。「人の道は、又万物を生養愛育して、其の生を遂げしむ。之を名づけて、仁といふ」。「況や人君は、万民の父母として、四海を家とす（中略）匹夫匹婦も其の所を獲ざる者を救ふ所以の道を尽して息まざる者、仁愛の本心にして、人君の道なり」。仁こそ、君主の道であり、社会万民の所得せしめ共存を可能にする人倫の基本なのです。

では、仁とは何でしょう。それは愛である。君主が我が民を愛することであると元田は答えます。「蓋し人君の大徳は、仁に止りて、治道は、人を愛するに在るのみ。若し人を愛するの心至らざる時は、事業大なりと雖も、国家富強なりといへども、天職の仁に悖れば、其の余は觀るに足らず。今陸海軍を皇張するも、人を愛するが為なり。憲法民法を布くも、人を愛するに因てなり。教育勸業も、人を愛するが為なり。鉄道電信も、人を愛するに由てなり。凡そ国家の施す所、一として人を愛する事にあらざるることなし。若し人を愛する心より出でずして徒に事業を盛にして、欧州の文明と競争せんと欲するが如くならば、則ち是れ国家の長たる人の心に非ずして、民心亦服す可からず。故人君は、常に人を愛するの心を以て、主として、一事一業、皆な此の愛心より出ん事を顧みざる可からず」。

もつとも、あるいは次のような疑念が生じるかもしれない。人の心は様々で、現実には必ずしも理想的ではない。それゆえ武力で威圧したり巧妙に騙したりして統治する方がずっと現実的ではないのか、と。そうした疑問に対して、元田は断乎として異議を唱えます。「蓋し国家に長たる人、威力を以て圧制せんとすれば、下民亦激昂して相凌がんとし、上、権略を以て籠絡せんとすれば、下、また詐術を以て相欺かん」。それは人倫に悖る、醜悪以外のなにもでもない世界だと峻拒します。

だからこそ、歴代の天皇は、民を愛する心を肝に銘じ、ひたむきに孔子の教えを学び徳を修めることに勤めてきたのです。文明開化の時代となり、立憲政治の時代となっても、このことは断じて忘れてはならないし、むしろこうした時代だからこそ統治を安定させるためには、意識して継承していく必要があると元田は訴えるのです。「列祖、皆な此の愛心を継承し、以て天下臣民を子育し給う（中略）然るに、輓近欧州の学理を偏信し、宗教の專習する所、政事は憲法に由て成立する者、教育は論理法律諸科の芸業と看做し、祖宗の仁徳、今世の憲法政事に用ひられず。君徳と云へば、僅に帝室の慈恵に止まるのみと思するは、真に道を知らず、徳を愆る者と謂ふべし。夫れ教育なり、政事なり、憲法なり、刑律なり、一つとして、人を愛し、民

を治むるの器具にあらざるはなし。苟も人を愛するの心なくして、徒に法制の末を整理するは、是れ徒法徒制にして天下の治まらんことを求むるとも、豈得べけんや」。

このように元田は、天皇に対して、繰り返して統治における道徳の重要性と民を愛することの大切さを語っていったのです。

次に、修養論に移りたいと思います。では、どのようにすれば優れた君主になれるのでしょうか。元田は、その修養の仕方についても力をこめて講じます。

優れた君主になるためには、まず学ぶことを志し、努力を始めることがなにより大事です。論語「二十篇の大旨、只此の学の一字なり。凡そ人、天地の間に生れ、天子より庶人に至るまで、畢生の事業、只此の学の始めを為し、終りを為す者なり。故に此の学あれば、其の天職を全うす、此の学なければ、其の天職を失ふ（中略）人間天下万事の成敗、此の学の明暗にあるのみ」。つまり、君主として生まれた以上は、真に君主らしく生きることを決意し学び続けること、すなわち修養を継続することが緊要なのです。しかし修養といっても、断食して瞑想するなどといった特殊な方法をとる必要はありません。孔子の道を学ぶという、知的で理性的な努力を継続すれば、禽獣とも暴君とも異なる、真に君主らしい君主になることが可能となるのです。

その際、元田は、学ぶにあたっては、個性的な君主になるうとか、自分の意見を大事にしようなどと思わないことが肝腎だと言います。「我見私説を主張するより害あるはなし」。むしろ自我を捨てて我を忘れて、一心に孔子の教えを学ぶことが大切だと注意します。すでに道はあるのです。あとに続くものは、その道を信じ、その道をたどり、我が物とすることに集中することが肝要なのです。「故に必ず法を、古先聖王に取り、己を捨て、一に聖賢を之れ信ぜざる可からず」。

しかしながら、これでは古くさい型に自分の個性を無理に押し込めることになるのではないのでしょうか。元田は、そう思い煩う必要はないと論じます。むしろ道に合し聖人と一体化することによって、逃れがたい欲望や情動から身を離し、慎み深く私心のない、真に君主らしい君主になることができるのです。「孔子の学を学べば（中略）固より人我の私心無く、飽くまで謙讓して己が智を智とせず、己が力を力とせず（中略）毫も争勝憤慍の念あることなし」。これが朱熹のいう「先覚の為す所に做ふと云ふ」意味なのです。

もつとも、これはあまりに樂觀的ではないでしょうか。聖人の道を学び、共に学んだ人々と互いに信じ合い、助け合うことは確かに楽しいことです。しかしいつもそうなる

とは限らない。時勢に「順逆の変」があり、人には好悪の感情があり、「悉く順理の如く」なることは不可能です。「時勢否塞、人情齟齬し、人己の才徳器量を知らず、善を悪とし、長を短とし、万事違卻する」。その場合はどうするのでしょうか。実はそうした逆境の場合こそが、修養の試金石なのだと言田は励まします。その際にあっても、いささかも動ぜず、怒りも顕わにせず、泰然と対処できるように「大勇」を奮って学び勤めることが、君主の君主たる所以であり、そうでなければ君主とはいえないのです。「泰然之に処して、毫も憤悶するなきに非ざれば、以て君子と称して、己を修め、人を治むるの大徳を成すこと能はざるなり」。

しかも、道を学び勤めても、安易に解ったなどと慢心してはなりません。古来、誰でも聖人の道に接し、当初はその道に魅せられ、「憤然として志を興し、其人と為りを希慕せざるものなし」という状態になります。しかし時間の経過とともに、いつしか気が緩み物欲が兆し「怠惰荒廢に及び」ついに習熟に至らない例は、歴史上それこそ枚挙に暇がありません。漢の武帝、唐の玄宗皆しかりです。それゆえにこそ、不断に心を引き締め、何事につけ懈怠なく内省を繰り返し、ついに教えが身体を「浹洽貫通」して、「自得愉悅」の域に達するまで修養を続けることが切要な

のです。「万機の前に至るものは、必ず之を心に求め、之を書に繹ね、之を古典に質し、之を現今に徴し、孰か理、孰か非、孰か公、孰か私、審かに問ひ、慎んで思ひ、朝夕怠らず、中夜にして又之を思ひ、日に月に積累習熟の時に至ては、天下の道理、陛下の御心に浹洽貫通して、疑ふ所無く、人知らざるの地に欣然独笑して、其の自得愉快、実に言ふ可からざるべし」。

教えが天皇の心を「浹洽貫通」して、「自得愉快」の域に達するまでには、当然のことながら、厳しい修養の積み重ねを避けることはできません。元田は、その過程を「千枝の花は、嚴霜烈日を経て始めて爛漫の色を発し、百尺の松は、断崖絶壁の間に屈曲して後、千秋の碧を放つ」という鮮烈な比喻によつて解説し、奮起を促すのです。

以上のように、元田の論語の講義は進められました。では、天皇はこれをどのように受け止めたのでしょうか。果たして、天皇の反応は非常に前向きなものでした。元田の自伝の中には「皇上屢々此書悦ばし、講ずる所善しと称し玉ひ、時に或は御論を発しられ、頗る御喜意の発見を窺ふことを得たり」（還暦之記）とか、あるいは「皇上論語の講筵を開かれてより、爾来屢々此書の面白しとの御諭を蒙り、聖識の益々進ませられ義理を好ませらるゝの愈々深きを恐察し奉りたる」（古稀之記）といった記述が残されています。

また天皇が元田の講義を喜び楽しんだことは、講義が終わつた明治十一年四月、元田が郷里熊本の親友である下津休也に次のように感激を書き送っていることから確認できます。「学而之首章より御対読申上、只今為政の始め迄御卒業被遊、毎講義近切にて面白しとの勅褒を賜はり、聖意に適し、実に欣躍無涯に奉存候」。元田の心底からの喜びが伝わってくるような書簡です。

では、元田の講義はなにゆえに天皇に好意をもつて受け容れられたのでしょうか。ひとつには、タイミングの問題があると思います。前述したように、この明治十一年は、明治天皇が西南戦争を経て、君主とはいかにあるべきか、統治とはいかにあるべきかを真剣に模索していた時期でした。まさに模索し、渴望していたからこそ、論語の言葉がこれまでとは違って聞こえたのでしょうか。もっとも元田は、従来も様々な機会に講義の内容に近い話はしていたと思います。しかしそれまでの天皇には、それに感応するだけの用意がなかった。それがこの時期になると、天皇は、集中的に講義を受けたこともあって、論語の抽象的な言葉を、具体的な経験や事象と結びつけ、その意味を生き生きとしたものとして諒解する知的成熟に達しつつありました。問題意識と知的能力、この二つがちやうど絶妙のタイミングで揃つたことで化学反応が引き起こされ、天皇の論語に対

する興味が喚起されたのだと思います。

そして元田の論語講義の内容が、これまで天皇が手探りで探していたものを確認し、天皇の背中を押してくれるものであったことも大きいと思います。君主として倫理的に生きるということ、君主として国民を愛するということは、すでに天皇が試行錯誤しながら実践しつつあったことでした。元田の統治論と修養論は、それをより広い儒学の観点から捉え直して、激励とともに、真に君主らしい君主とは何かを解き明かし、君主としてなすべきことを指し示し、そしてそうした君主になるために学び続ける方法を提示してくれるものだったのです。それは、天皇に安堵と自信をもたらし、天皇という地位を前向きに受容する契機になっていったと思います。

そして、こうした元田の講義に触発された儒学的君主としての生き方は、単なる教養としてではなく、その後の天皇の政治観や政治的实践にも大きな影響を与えてきました。その一例として、翌明治十二年七月十九日、元田が下津に宛てた書簡を挙げておきましょう。この書簡は、前段で天皇の益々の成長ぶりを紹介した上で、天皇の基本的な政治についての考え方を次のように紹介しています。「其大綱領を申上候得ば、第一日本国は日本の国体基礎を建て、狼りに外国の流風に移らざる様に、第二は忠孝仁義を本と

して、専ら智力に馳せざる様に、第三は節儉を主とし、洋風の建築を不致様にとの御見識は、確乎不拔の御定論」。軽佻な洋風化を戒め、日本の国柄に基づいた、「忠孝仁義」を大事にした政治、それを、天皇は好ましいと考えているのです。ここに、元田の講義と共鳴するものを見いだすのは難しいことではないでしょう。そして、こうした儒学的な教養に基づいた、天皇の政治的姿勢は、その後も一貫して続いていくことになるのです。

以上のように、西南戦争後の明治天皇は、急速に成長していきました。西南戦争が与えた深刻な衝撃から立ち直ると、明治天皇は、自らの反省の上により良き君主になることを決意し、その努力を開始します。そしてそれは、君主とは何か、よき統治とは何かという模索につながりました。その模索に際して、元田による論語の講義が、明治天皇が明治天皇となる上で非常に大きな役割を果たしたのではないかと、これが本日拙い話でお伝えしたことであります。

天皇が元田の講義を受けていたのは、西南戦争が終わってから、政府の中心だった大久保利通が暗殺されて再び激動の政局が始まるまでの、ちょうど幕間のような静かな期間でした。政治という荒々しい舞台に本格的に登場する前、そういうエアポケットのような静かな環境の中で、君

主としての自覚を高め、君主としての生きた方をじっくりと学び考えることができたのは、偶然とはいえ、天皇にとっても、近代日本にとっても、たいへん幸福なことだったと思います。改めて明治天皇の政治的人格と長い政治的人生を考える上で、この一年は極めて重要な一年だったと思うのです。ご清聴ありがとうございました。

参考文献

- 元田竹彦・海後宗臣編『元田永孚文書』第一巻―第三巻（東京大学出版会・昭和四四年）
- 沼田哲・元田竹彦編『元田永孚関係文書』（山川出版社・昭和六〇年）
- 日野西資博『明治天皇の御日常』（新学社教友館・昭和五一年復刻）
- 宮内庁編『明治天皇紀』第三巻・第四巻（吉川弘文館・昭和五二年）
- 徳富猪一郎編著『元田先生進講録』（民友社・明治四三年）
- 一海知義『論語語論』（藤原書店・平成一七年）
- 渡辺浩『日本政治思想史』（東京大学出版会・平成二二年）
- 坂本一登『明治天皇の形成』（明治維新史学会編『講座明治維新』第四巻所収・有志舎・平成二四年）
- 「憲法の守護者としての使命感と強い思い」（『歴史読本―明治天皇一〇〇年目の実像』平成二四年二月号）

（國學院大學法学部教授）